

本学体育学部学生の保健体育科教員志望動機に 中学校・高等学校の運動部活動指導者である教員が及ぼす影響

The Effect of Experience with High School Teachers of Sport Clubs on the Motivation to Be Teachers Among Students of Tokyo Women's College of Physical Education

キーワード: 教員志望動機、中学校・高等学校、運動部活動

Key words: motivation to be teachers, high school, sport club

大石 千歳

OISHI Chitose

問題意識および目的

本研究の目的は、本学（東京女子体育大学）に入學してくる学生を対象として、中学校・高等学校（諸外国におけるいわゆるハイスクール）の運動部活動の指導者である教師と生徒の関わりや信頼関係が、部員である生徒の将来の職業面でのキャリア意識にどのように影響を与えるかを検討することである。

体育大学に進學してくる学生は何を求めて進學を決めたのか、また将来はどんな職業に就きたいと考えているのかは、本学にとって重要な問題である。

体育大学に進學する学生は、ほぼ全員が中学校・高等学校時代に学校の運動部活動に所属し、そこで専門のスポーツ種目の競技力を高めて体育大に進學してくる。中澤（2011）によれば、日本の中学校・高等学校における運動部活動への教師の関わり方については1970年代に、「教師が技術指導や管理その他、運動部指導のすべてを行う」というスタイルが確立されていき、運動部指導の負担の重さが指摘されるようになった。また中澤（2011）は、日本の中学校・高等

学校の運動部は、週5日以上活動日と練習時間の長さの特徴としており、指導する教員はその学校の教員で、わずかな報酬にもかかわらず私生活を犠牲にしながら献身的な指導を行うのが特徴であるという。

中学校・高等学校の運動部員は、指導者である教員からそのような熱心かつ長時間の指導を受けることで、スポーツ面だけでなく、生活や将来の進路などについても、大きな影響を受けると考えられる。

本研究の先行研究として、大石（2014）は、本学短大（東京女子体育短期大学）児童教育学科女子学生151名に調査を行った。調査対象者である学生は、児童教育専攻の短期大学学生であるが、体育大学併設の短大を志望してきた学生たちであり、ほとんどが中学校や高等学校で運動部活動を経験している。本学短大児童教育学科は、他の幼児教育系の短期大学と比較して体育実技の授業が数多く設置されており、卒業後に教職に就く場合は、体育の専門性を持った幼稚園教諭・小学校教諭として就職してゆく。大石（2014）では、このような学生たちに「最も印象に残った先生」について尋ねた。幼稚園（保

本研究の一部は、IAEVG（International Association for Educational and Vocational Guidance）International Conference 2015（国際キャリア教育学会）において発表された。なおこの学会は、日本キャリア教育学会第37回研究大会（つくば）と共同で開催されている学会である。（OISHI-SHIMOMURA, C. 2015 The effect of Japanese Physical Education College Students' Experience with Previous Teachers on the Motivation for a Career in Teaching. Paper Session Presented in IAEVG International Conference 2015, p. 111).

育園)の先生、小学校の先生、中学校のクラス担任の先生、中学校の部活動の先生、中学校のそれ以外の先生、高等学校のクラス担任の先生、高等学校の部活動の先生、高等学校のそれ以外の先生、学校以外の習い事の先生のうちから一人選んでもらい、どんな先生だったかを自由記述してもらった。

その結果、中学校の部活動の先生を選んだ回答者が22名(15.5%)、高等学校の部活動の先生を選んだ回答者が46名(32.4%)であり、両者を合わせて実に約半数の学生が「運動部の先生」を選んでいた。

運動部の指導者である教員に対する自由記述の内容としては、「厳しかったが自分を成長させてくれた」「競技以外の、人としてどうあるべきかということも教えてくれた」といった内容が多くあった。運動部活動の先生はスポーツそのものだけでなく、人間としてのあり方を教えてくれた、成長させてくれた、社会に通用するように育ててくれた、恩人である、親のような存在である、などという回答が目立った。

日本の中学校や高等学校での運動部活動は、このように生徒のスポーツ面での成長のみならず、人格形成にも大きな影響を与えている。体育大学に進学する学生の多くは、学校の体育教師になりたい、もしくは教員免許を取得したいと思っているが、そういった将来の進路希望やキャリアに対する意識について、中学校や高等学校の運動部の指導者が与える影響は大きいと予測される。

そこで本研究は、大石(2014)の研究をもとに、本学体育学部3年生のうち、中学校・高等学校の保健体育科の教員免許を取得したい学生を対象に、以下の点を検討する質問紙調査を行うことにした。

方法

調査対象者・実施時期：

本学(東京女子体育大学体育学部)における中学校・高等学校の保健体育科一種教員免許状取得のための教職科目を履修する大学3年生291名であった(4年生を数名含むが、回答者が特定されるので学年は尋ねていない)。本学研究倫理審査委員会の許可を得て、以下の内容の質問紙調査を実施した。

実施時期は平成26年4月であった。

質問紙の内容

1. 中学校・高等学校の教職を志望する動機の評価とその理由の自由記述：4件法で評定するとともに、理由を自由記述で記してもらった。

2. 中学校で出会った「好きな先生」「嫌いな先生」に関する自由記述：どんな先生だったか自由に記載してもらった。あてはまる先生がいない場合には、空欄にせず「いない」と記載してもらった。

3. 高等学校で出会った「好きな先生」「嫌いな先生」に関する自由記述：どんな先生だったか自由記述で尋ねた。あてはまる先生がいない場合には、空欄にせず「いない」と記載してもらった。

4. 教師志望動機尺度(春原, 2010)：第一因子「学校教授志向」(5項目)、第二因子「目的無自覚・同調」(5項目)、第三因子「子ども志向」(2項目)、第四因子「恩師志向」(2項目)、第五因子「経験活用志向」(4項目)の計18項目から構成されている。

5. 最も印象に残った先生の選択と自由記述：幼稚園(保育園)の先生、小学校の先生、中学校の担任の先生、中学校の部活の先生(顧問や監督)、中学校の担任や部活の先生以外の先生、高等学校の担任の先生、高等学校の部活の先生(顧問や監督)、高等学校の担任や部活の先生以外の先生、学校以外の習い事の先生の中から「最も印象に残った先生」(いい意味でも悪い意味でもよい)を一人選んでもらうとともに、どんな先生か自由記述形式で尋ねた。なお本学体育学部学生は、入試時の資料によればほぼ全員に近い程度で、高等学校在学中に運動部活動に加入しているという実態があるため、部活の先生(顧問や監督)は、ほぼ全ての調査対象者にとっては運動部活動の指導者である教員を指すことになる。中学校でも同様に、非常に割合で運動部活動に所属していると考えられた。また、主として中学校・高等学校以外の外部での習い事で競技を行っていた学生も想定し、習い事の先生という選択肢も用意した。

6. 教師との関わり経験尺度(中井・庄司, 2009)：5で選んだ先生について、教師との関わり経験尺度(中

井・庄司, 2009)「最も印象に残った先生」について評定する形で実施した。第一因子「教師からの受容経験」(7項目)、第二因子「教師との傷つき経験」(8項目)、第三因子「教師との親密な関わり経験」(6項目)、第四因子「教師からの承認経験」(3項目)の計24項目(4件法による評定)から成る。

7. STT尺度(中井・庄司, 2008):5で選んだ「最も印象に残った先生」について評定した。第一因子「安心感」(11項目)、第二因子「不信」(10項目)、第三因子「役割遂行評価」(10項目)の計31項目(4件法による評定)で、教師に対する信頼感を測定する尺度である。

結果および考察

自由記述結果の分類

1. 教職を志望する理由(志望動機アフターコード) 教職を志望する動機に関する自由記述結果について

て、アフターコードによる分類を行った(表1)。個々の回答者が最も重視している内容をシングルアンサーとして集計した。表1は、積極的に教員を目指す方向性を示す内容と、迷いがみられるもしくは教員を目指さない内容とに分けて表示した。

教員を志望する方向において多かった回答は「子どもの成長を見守りたい(27名)」であり、次いで「恩師のようになりたい(26名)」「スポーツの楽しさを教えたい(21名)」「夢だから(19名)」であった。体育大学の学生は、中学校・高等学校時代に部活動に打ち込み、そこで出会った恩師を自分自身のキャリアのモデルにしていることが回答に示されている。すなわち、「恩師のような教師になって、子どもにスポーツを教えることで、子どもたちの成長を見守る。それが私の夢だから」という将来の自分の働く姿を思い描いていることが如実に表れている。

教員志望に関して迷いをもっている内容の記述としては、「ほかになりたい職業がある(51名)」「なりた

表1. 教員志望理由に関する自由記述の分類結果

教職志望理由・自由記述の分類	度数	%
子どもの成長を見守りたい、人とかかわりたい	27	9.3
恩師のようになりたい	26	8.9
スポーツの楽しさを教えたい、教えることが好き	21	7.2
夢だから	19	6.5
資格を取得したい、就職に有利だから	9	3.1
自分の種目を教えたい、部活指導をしたい	7	2.4
教員になるために本学に進学	7	2.4
公務員になりたいから、収入が安定しているから	5	1.7
運動が好き	4	1.4
親や先生に勧められたから	3	1.0
この大学に来たから教員志望にする	1	.3
ほかになりたい職業がある	51	17.5
なりたいが難しいと思う	27	9.3
迷っている	19	6.5
教員は大変そうだから	10	3.4
教員に向いていない	8	2.7
なるつもりはない	6	2.1
教員でなくてもスポーツ教えられる	3	1.0
その他	4	1.4
無回答	34	11.7

N=291

いが難しいと思う(27名)」「迷っている(19名)」などが多かった。ほかになりたい職業があるという回答の中には、他の校種(小学校など)やスポーツクラブの指導者など、中学校・高等学校以外での教育の道に進みたいという回答も含まれており、学生の将来の進路に関する記述としては一概にネガティブな内容とはいえない。教員志望動機をストレートに否定する内容の記述は、「教員は大変そうだから(10名)」「教員に向いていない(8名)」「なるつもりはない(6名)」など、あまり多くはなかったといえる。

2. 印象に残った先生に関する自由記述

自由記述結果を分類しアフターコードを行った(表2)。最も回答数が多かったのは「熱心」な先生で47名であった。次いで「理解してくれる、親身になってくれる(43名)」「成長させてくれた、厳しく指導、人生も指導(30名)」「メリハリがある、けじめがある(18名)」「指導力がある、有能、尊敬できる(18名)」「話しやすい、悩みを聞いてくれる(15名)」「一緒に活動してくれる(13名)」と続いていた。印象に残る先生に

関しては、いい意味でも悪い意味でも構わないと教示したにも関わらず、ネガティブな理由で印象に残る先生を選んだ回答者は9名しかいなかった。この結果からは、教職課程履修者は、生育歴において接した先生に対して、概ねよい印象を持っていることが示された。

3. 印象に残った先生の種別と回答者の教職志望動機の関連性

表3に示したように、印象に残る先生としては「高等学校の部活動の先生」を選んだ学生が125名と突出して多かった。次に「中学校の部活動の先生」が45名であった。体育大学に進学する学生にとって、高等学校や中学校での部活動の先生は圧倒的な存在感を持つことがデータから裏付けられた。次いで「高等学校担任の先生」が29名、「小学校の先生」が21名、「中学校の担任の先生」18名となっていた。

この結果は、高等学校の運動部員が将来の進路として体育大学を選択すること、またその根拠として教員免許取得が挙げられること、そしてそれらの選択肢

表2. 印象に残る先生に関する自由記述の分類結果

印象に残る先生・自由記述の分類	度数	%
熱心な先生	47	16.2
理解してくれる、親身になってくれる先生	43	14.8
成長させてくれた、厳しく指導、人生も指導	30	10.3
指導力がある先生、有能、尊敬できる	18	6.2
メリハリのある先生、けじめのある先生	18	6.2
話しやすい先生、悩みを聞いてくれる	15	5.2
一緒に活動してくれる先生	13	4.5
楽しい先生、面白い、好かれている	8	2.7
父親・母親のような先生	7	2.4
自分を応援してくれた、味方になってくれた	7	2.4
笑顔が素敵、明るく元気な先生	4	1.4
優しい先生	4	1.4
生徒の自由にさせてくれた	3	1.0
平等な先生	0	0.0
ネガティブな内容	9	3.1
いない	0	0.0
その他(属性等)	14	4.8
無回答	51	17.5

N=291

を生徒に教え勧める存在として、運動部を指導する教員の重要性は大きいことをデータにより示したものと見える。

表3における、印象に残った先生の種別と、回答者である学生の教職志望動機(4件法)のクロス集計結果をさらにみると、「高等学校の運動部の先生」を選んだ回答者は、教員になりたいと「非常にそう思う」「少しそう思う」割合を合わせると、76%であった(125名のうち95名)。「中学校の運動部の先生」を選んだ回答者は、82%であった(45名のうち37名)。運動部の指導者である先生の影響力が、体育大学学生の将来のキャリア・職業に関する意思決定にいくに大きな影響力を持っているかがここでも示されたといえる。

運動部活動の指導者が生徒に与える影響につい

ては、従来は当該の競技における競技力や競技の継続といった観点で取り上げられることは多くあったも、将来のキャリア・職業の選択に関する意識決定という側面が強調されることは少なかったのではないだろうか。今後は中学校・高等学校でのキャリア意識・進路選択という側面での運動部活動の機能をより直接的に取り上げて検討していくことが重要であろう。

4. 印象に残った先生の種別とその先生を選んだ理由(自由記述)の関連性

表4には、印象に残った先生の種別と、その先生を選んだ理由に関する自由記述内容のクロス集計結果を示した。表4では、表2の自由記述内容に対して、クロス集計を行いやすいようにカテゴリーの統合を行った。「理解してくれる」は、表2のカテゴリーのうち、

表3. 印象に残った先生の種別と回答者の教員志望動機のクロス表

度数	教員志望動機 (4件法)				合計
	全くそう思わない	あまりそう思わない	少しそう思う	非常にそう思う	
印象に残った 幼稚園・保育園の先生	0	0	1	0	1
先生の種別 小学校の先生	2	6	9	4	21
中学校担任の先生	1	3	6	8	18
中学校部活の先生	1	7	21	16	45
中学校担任部活以外	0	3	8	2	13
高校担任の先生	0	6	14	9	29
高校部活の先生	7	23	59	36	125
高校担任部活以外	0	6	5	2	13
習い事の指導者	1	1	12	1	15
合計	12	55	135	78	280

表4. 印象に残った先生の種別と自由記述内容のクロス表

度数	印象に残った理由 (自由記述内容)				合計
	理解してくれる	人柄よい	指導力高い	ネガティブ	
印象に残った 小学校の先生	4	6	7	2	19
先生の種別 中学校担任の先生	2	2	9	0	13
中学校部活の先生	10	0	27	2	39
中学校担任部活以外	3	2	4	0	9
高校担任の先生	13	5	6	0	24
高校部活の先生	29	12	49	4	94
高校担任部活以外	4	2	3	1	10
習い事の指導者	2	4	6	0	12
合計	67	33	111	9	220

「理解してくれる、親身になってくれる先生」「話しやすい先生、悩みを聞いてくれる」「自分を応援してくれた、味方になってくれた」「生徒の自由にさせてくれた」をまとめたものである。「人柄よい」は、表2のカテゴリのうち、「笑顔が素敵、明るく元気な先生」「楽しい先生、面白い、好かれている」「一緒に活動してくれる先生」「優しい先生」「父親・母親のような先生」をまとめたものである。「指導力高い」は、表2のカテゴリのうち、「指導力がある」「メリハリのある先生、けじめのある先生」「成長させてくれた、厳しく指導、人生も指導」「熱心な先生」「平等な先生」をまとめたものである。「ネガティブ」は、表2のカテゴリのうちの「ネガティブな内容」である。なお印象に残った先生の種別に欠損値を含むデータがあるので、表4の各区分の合計度数は表2の各カテゴリの合計をやや下回る。

圧倒的に多かった回答が、高等学校の部活の先生であり、自由記述に何も記載しなかった回答者や印象に残る教師はいないと答えた回答者を除いた220名のうち、実に94名を占めた。その中でも自由記述内容の約半数が「指導力」の高さを指摘し(49名)、「理解してくれる」との回答がそれに次いでいた(29名)。中学校の部活の先生も39名によって回答されており、うち「指導力」の高さを記述したもの(27名)と「理解してくれる」という点を指摘したもの(10名)が多かった。この結果からも、高等学校および中学校の運動部の指導者である先生の影響力の大きさが見て取れる。

5. 中学校・高等学校の「好きな先生」について

中学校の好きな先生についても、自由記述内容をアフターコードした。多かった回答は「理解してくれる、親身になってくれる(53名)」、次いで「話しやすい、悩みを聞いてくれる(37名)」「メリハリがある、けじめのある(29名)」「熱心(25名)」「指導力が高い(22名)」「笑顔が素敵、明るく元気(21名)」「楽しい、面白い(16名)」であった。「いない」という回答は43名であった。中学生が先生に求めることとして、まず自分を理解してほしい、悩みを聞いてほしいとの思いが非常に強いこと、そしてけじめをしっかりつけて叱るときは叱

るなどができ、指導力が高いこと、加えて熱心で元気なバイタリティがあることであることがわかる。

高等学校では、「理解してくれる、親身になってくれる(52名)」「話しやすい、悩みを聞いてくれる(52名)」、「指導力がある(32名)」「熱心(30名)」「メリハリのある、けじめがある(20名)の順であり、「いない」は29名であった。

6. 中学校・高等学校の「嫌いな先生」について

中学校の嫌いな先生については、「えこひいき、理不尽(45名)」、次いで「すぐ怒る、怖い(40名)」「偉そう、いばる、考えを押し付ける(37名)」が多かった。他に多かったのは「熱意がない(18名)」「コミュニケーション下手(14名)」などであった。また、「いない」という回答は87名であった。教職課程を履修する学生は、やはり教師との関係性は良好であったといえるのではなかろうか。

高等学校での嫌いな先生に関しては、「すぐ怒る、怖い(31名)」「えこひいき、理不尽(21名)」「熱意がない(19名)」「偉そう、いばる、考えを押し付ける(16名)」「授業が下手、指導力がない(16名)」と続いた。高等学校の場合は、中学校と同様の結果に加えて、授業の下手さ・指導力のなさが上位に挙がった。いないと答えた回答者が134名で実に50%弱を占めた。

7. 心理指標に基づく分析

教職志望動機尺度(春原, 2010)、教師との関わり尺度(中井・庄司, 2009)、およびSTT尺度(中井・庄司, 2008)の各下位尺度に基づく心理指標について、以下の群分けに基づく平均値の比較を行った。

- ・ 中学校の好きな先生(理解してくれる、人柄がよい、指導力が高い、いない)の4群による一要因分散分析と多重比較(LSD検定)。
- ・ 中学校の嫌いな先生(人柄が悪い、指導力が低い、理不尽、無気力、いない)の5群による一要因分散分析と多重比較(LSD検定)。
- ・ 高等学校の好きな先生(理解してくれる、人柄がよい、指導力が高い、いない)の4群による一要因分散分析と多重比較(LSD検定)。
- ・ 高等学校の嫌いな先生(人柄が悪い、指導力が

低い、理不尽、無気力、いない)の5群による一
要因分散分析と多重比較(LSD検定)。

- ・印象に残る先生自由記述のアフターコード(理解してくれる、人柄がよい、指導力が高い、ネガティブな内容)の4群一要因分散分析と多重比較(LSD検定)。
- ・印象に残る先生の校種などの種別(小学校の先生、中学校担任、中学校部活、中学校担任部活以外、高等学校担任、高等学校部活、高等学校担任部活以外、習い事指導者)の8群による一要因分散分析と多重比較(LSD検定)。

7-1. 教職志望動機尺度(表5):春原(2010)に示された下位尺度である「教授志向」「無自覚・同調志向」「子ども志向」「恩師志向」「経験活用志向」の5つについて、属する項目の平均値を合計し項目数で割ったものを、各測定指標とした。

教授志向について(生徒に教えたいから教職に就きたい):中学校での好きな先生について「理解してくれる」「人柄がよい」「指導力が高い」と答えた回答者は教授志向が高かった。

中学校での嫌いな先生については、「指導力が低

い」先生を選んだ学生の教授志向が低かった。指導力が高い先生、生徒を理解してくれる先生と出会うと、教授志向が高まる。反対に、指導力が低い先生に出会うと、教授志向は低くなる。

同調志向について(周りに流され何となく教職を目指している):印象に残る先生で「ネガティブな内容」を回答した人が、同調志向が低かった。ネガティブな先生に出会ってもなお教職を目指す人は、自分の明確な意志がある。

中学校で「指導力が高い」を挙げた人の同調志向は低かった。指導力の高い先生に出会っている人は、自分の明確な意思で教職を履修している。

高等学校の好きな先生については、「指導力が高い」を選んだ人は、同調志向が高かった。一方で、指導力の高い高等学校の先生に同調する形で教職を履修している可能性もある。

子ども志向について(子どもが好きで教職を目指している):印象に残る先生の種別では、「高等学校の担任部活以外」と答えた人の子ども志向の低さが目立った。生徒と積極的に向かい合ってくれる先生と出会えていないことが影響しているといえる。

中学校での嫌いな先生に関しては「人柄が悪い」

表5. 教職志望動機諸指標に関する平均・標準偏差(SD)および各条件間の比較

		教授志向				同調志向				子ども志向				恩師志向				経験活用志向			
印象に残る先生・自由記述	N	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較
1. 理解してくれる		2.75	(.61)			2.46	(.49)	*	1>3,1>5	3.10	(.67)		3>5	3.17	(.79)	+	1>5,2>5	2.43	(.60)		
2. 人柄がよい		2.72	(.70)			2.48	(.46)		2>3,2>5	3.11	(.73)			3.10	(.77)		3>5	2.38	(.63)		
3. 指導力が高い		2.75	(.59)			2.30	(.51)			3.19	(.70)			3.26	(.73)			2.44	(.59)		
5. ネガティブ内容		2.62	(.82)			2.04	(.47)			2.72	(.83)			2.61	(1.19)			2.44	(.86)		
	N	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較
1. なりたい	127	2.92	(.59)	***	1>2	2.30	(.52)	*	1<2	3.34	(.62)	***	1>2	3.42	(.70)	***	1>2	2.56	(.60)	***	1>2
2. なりたくない	124	2.56	(.64)			2.44	(.45)			2.90	(.72)			3.04	(.81)			2.27	(.59)		
印象に残る先生の種別	N	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較
1. 幼稚園・保育園の先生		2.40				2.60				3.50				3.00		**		2.25			
2. 小学校の先生		2.58	(.57)			2.35	(.39)			3.10	(.74)			2.71	(.73)			2.40	(.60)		
3. 中学校担任の先生		2.82	(.75)			2.26	(.55)			3.29	(.75)			3.22	(.83)			2.36	(.70)		
4. 中学校部活の先生		2.85	(.59)			2.44	(.53)			3.26	(.64)			3.43	(.68)			2.45	(.51)		
5. 中学校担任部活以外		2.89	(.61)			2.54	(.51)			3.15	(.63)			3.35	(.43)			2.60	(.54)		
6. 高校担任の先生		2.92	(.60)			2.45	(.42)			3.14	(.75)			3.34	(.60)			2.60	(.59)		
7. 高校部活の先生		2.70	(.60)			2.33	(.49)			3.12	(.66)			3.23	(.78)			2.40	(.63)		
8. 高校担任部活以外		2.55	(.57)			2.40	(.46)			2.69	(.78)			2.85	(1.01)			2.08	(.58)		
9. 習い事の指導者		2.51	(.65)			2.35	(.51)			3.03	(.81)			2.87	(.69)			2.17	(.57)		

注1: *は $p<.05$, **は $p<.01$, ***は $p<.001$, +は $p<.10$ で有意傾向を表している。

注2: 3群以上ある分類については1要因の分散分析を行い、多重比較はLSD法である。主効果が有意でなくても多重比較で有意になっている部分については記載した。

注3: 2群しかない分類についてはt検定を行っており、主効果の欄は2群の有意差の有無を表し、多重比較の欄は2群の平均値の大小関係を表している。

注4: 各分析指標については欠損値を含むデータが分析対象外となるため、度数は各指標において多少異なる。

注5: 印象に残る先生・自由記述では、4:「いない」と記述した回答者は0であったので、このカテゴリーは本表からは省略した。

「理不尽」と答えた人は子ども志向が高かった。

高等学校の嫌いな先生に関しては、「無気力」と答えた人の子ども志向の高さが目立った。子どもと積極的に関わり育てたい人は、理不尽・無気力な先生が許せないであろう。

恩師志向（恩師の影響で教職を目指している）：印象に残る先生では、ネガティブな内容を記述した人の恩師志向の低さが目立った。印象に残った先生の種別では、「高等学校担任部活以外の先生」と「習い事の指導者」を選んだ人の恩師志向の低さが目立った。「小学校の先生」を選んだ人の恩師志向も低かった。中学校・高等学校の保健体育科教師を目指すのに、中学校・高等学校の部活の先生や担任の先生を印象に残った出会いに挙げられない、すなわちよい出会いがなかったことの影響と考えられる。

中学校での好きな先生について「理解してくれる」「人柄がよい」「指導力が高い」と答えた回答者（学生）は恩師志向が高かった。中学校の嫌いな先生については、「指導力が低い」を選んだ人の恩師志向が有意に低かった。高等学校もほぼ同様の結果で

あった。指導力が低いあのような先生のようにはない、との思いであろう。

経験活用志向について（学校でのつらかった経験を生かしたくて教職を志望する）：中学校での好きな先生について「理解してくれる」「指導力が高い」と答えた回答者（学生）は経験活用志向が高かった。

7-2. 教師との関わり尺度（表6）：中井・庄司（2009）の各下位尺度「受容経験」「傷つき経験」「親密経験」「承認経験」の4つの下位尺度について、属する項目の平均値を合計し項目数で割ったものを、各測定指標とした。

受容経験：印象に残る先生の種別では、「小学校の先生」と「高等学校担任部活以外」条件の受容経験の低さが目立った。中学校・高等学校の担任や部活の先生に、印象に残るような先生がいなかったという経験の影響が考えられる。

高等学校の嫌いな先生に関しては、「指導力が低い」条件が有意に受容経験が低かった。高等学校で、よい先生に出会えていないということであろう。

表6. 教師との関わり経験諸指標に関する平均・標準偏差（SD）および各条件間の比較

	受容経験				傷つき経験				親密経験				承認経験			
印象に残る先生・自由記述	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較
理解してくれる	3.32	(.54)	***	1>5,2>5	1.75	(.72)	***	1<2,1<5	3.33	(.49)	***	1>5,2>5	3.41	(.58)	***	1>5,2>5
人柄がよい	3.22	(.57)		3>5	1.48	(.50)		2<3	3.29	(.39)		3>5	3.44	(.55)		3>5
指導力が高い	3.32	(.54)			1.89	(.69)			3.41	(.43)			3.53	(.50)		
ネガティブ内容	2.14	(.80)			3.00	(.79)			2.56	(.82)			2.59	(.70)		
教員志望動機・自由記述	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較
なりたい	3.33	(.58)			1.74	(.70)			3.38	(.47)			3.55	(.53)		
なりたくない	3.28	(.59)			1.84	(.69)			3.38	(.50)			3.45	(.57)		
印象に残る先生の種別	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較
幼稚園・保育園の先生	3.00		+		1.00		**		2.50		**		3.67			
小学校の先生	2.97	(.52)			1.68	(.88)			3.16	(.39)			3.29	(.45)		
中学校担任の先生	3.41	(.50)			1.48	(.43)			3.55	(.35)			3.57	(.45)		
中学校部活の先生	3.28	(.66)			2.02	(.78)			3.46	(.47)			3.51	(.57)		
中学校担任部活以外	2.98	(.64)			1.92	(.81)			3.44	(.40)			3.50	(.61)		
高校担任の先生	3.26	(.53)			1.47	(.40)			3.47	(.41)			3.57	(.47)		
高校部活の先生	3.33	(.60)			1.83	(.67)			3.33	(.50)			3.45	(.58)		
高校担任部活以外	3.05	(.76)			1.70	(.77)			2.97	(.68)			3.15	(.65)		
習い事の指導者	3.46	(.45)			2.12	(.80)			3.27	(.39)			3.62	(.60)		

注1：*は $p<.05$ 、**は $p<.01$ 、***は $p<.001$ 、+は $p<.10$ で有意傾向を表している。

注2：3群以上ある分類については1要因の分散分析を行い、多重比較はLSD法である。主効果が有意でなくても多重比較で有意になっている部分については記載した。

注3：2群しかない分類についてはt検定を行っており、主効果の欄は2群の有意差の有無を表し、多重比較の欄は2群の平均値の大小関係を表している。

注4：各分析指標については欠損値を含むデータが分析対象外となるため、度数は各指標において多少異なる。

注5：印象に残る先生・自由記述では、4：「いない」と記述した回答者は0であったので、このカテゴリーは本表からは省略した。

傷つき経験(先生との関わりで傷ついたことがある):印象に残る先生では、「ネガティブ内容」を挙げた人の傷つき経験が圧倒的に高かった。「人柄がよい」を挙げた人は、傷つき経験が低かった。

印象に残った先生の種別では、「中学校の部活の先生」「習い事の指導者」を挙げた人の傷つき経験が高かった。「中学校担任の先生」「高等学校担任の先生」を挙げた人の傷つき経験は低かった。部活の先生や習い事の指導者は、印象の中に厳しさもあるのであろう。

親密経験(先生と親密な関わり経験がある):印象に残る先生自由記述については、「ネガティブ内容」の親密経験の低さが目立った。

印象に残る先生の種別では、「小学校の先生」「高等学校担任部活以外」を挙げた人の親密経験の低さが目立つほか、「習い事の指導者」を挙げた人が次いで親密経験が低かったといえる。中学や高等学校の運動部の先生や担任の先生として、よい先生に出会えていないということと解釈される。

承認経験(先生に承認された経験がある):

「習い事の指導者」を挙げた人は、中学校・高等学校の担任や部活の先生を挙げた人よりも、承認経験が高かった。体育大学という専門性が明確な大学に進学してきた人は、習い事(学外クラブ等)で行っていたスポーツの指導者からほめられ、認められるという経験をしてきている。

7-3. STT尺度(表7):中井・庄司(2008)の各下位尺度「安心」「不信」「役割遂行」の3下位尺度について、属する項目の平均値を合計し項目数で割ったものを、各測定指標とした。

安心:中学校・高等学校の好きな先生は「いない」と答えた人の安心得点は低かった。中学校の嫌いな先生については、「無気力」、高等学校の嫌いな先生については、「指導力が低い」「理不尽」を挙げた人の安心の得点が低かった。印象に残る先生の自由記述では、「ネガティブ内容」を挙げた人の安心の得点が低かった。印象に残る先生の種別では、「中学校の部活の先生」の安心得点が有意に高かった。

表7. STT尺度(教師への信頼感) 諸指標に関する平均・標準偏差(SD)および各条件間の比較

	安心				不信				役割遂行			
	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較
印象に残る先生・自由記述	3.15	(.59)	***	1>5,2>5	1.89	(.70)	***	1>2,1<5	3.37	(.42)	***	1<3,1>5
理解してくれる	3.10	(.55)		3>5	1.63	(.46)		2<5,3<5	3.40	(.38)		2>5,3>5
人柄がよい	3.18	(.58)			1.77	(.58)			3.50	(.39)		
指導力が高い	1.92	(.91)			2.98	(.57)			2.89	(.48)		
ネガティブ内容												
教員志望動機・自由記述	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較
なりたい	3.17	(.64)			1.74	(.64)	*	1<2	3.46	(.42)		
なりたくない	3.13	(.63)			1.95	(.68)			3.40	(.42)		
印象に残る先生の種別	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較	平均	(SD)	主	多重比較
幼稚園・保育園の先生	3.55				1.00				3.70		**	
小学校の先生	2.90	(.64)			1.78	(.85)			3.20	(.39)		
中学校担任の先生	3.26	(.51)			1.59	(.52)			3.46	(.36)		
中学校部活の先生	3.15	(.68)			1.86	(.66)			3.48	(.43)		
中学校担任部活以外	2.83	(.72)			2.09	(.79)			3.15	(.51)		
高校担任の先生	3.20	(.53)			1.63	(.53)			3.30	(.41)		
高校部活の先生	3.12	(.65)			1.90	(.67)			3.50	(.38)		
高校担任部活以外	2.90	(.70)			1.98	(.63)			3.15	(.56)		
習い事の指導者	3.24	(.59)			1.99	(.59)			3.46	(.46)		

注1: *は $p<.05$ 、**は $p<.01$ 、***は $p<.001$ 、+は $p<.10$ で有意傾向を表している。

注2: 3群以上ある分類については1要因の分散分析を行い、多重比較はLSD法である。主効果が有意でなくても多重比較で有意になっている部分については記載した。

注3: 2群しかない分類についてはt検定を行っており、主効果の欄は2群の有意差の有無を表し、多重比較の欄は2群の平均値の大小関係を表している。

注4: 各分析指標については欠損値を含むデータが分析対象外となるため、度数は各指標において多少異なる。

注5: 印象に残る先生・自由記述では、4:「いない」と記述した回答者は0であったので、このカテゴリーは本表からは省略した。

次いで高かったのは、「習い事の指導者」であった。専門のスポーツの指導に関わる先生方に安心感を感じている。

不信：印象に残る先生の自由記述では、「ネガティブ内容」を挙げた人が不信の得点が突出して高かった。印象に残る先生の種別では、「中学校の担任部活以外の先生」を挙げた人が最も不信の得点が高かった。中学校の担任の先生、高等学校の担任の先生を挙げた人の不信の得点は低かった。担任や部活動の先生として、よい先生に出会えていないといえる。

中学校・高等学校の好きな先生では、「いない」と答えた人の不信の得点が高かった。中学校・高等学校の嫌いな先生については、「理不尽」と答えた人の不信得点が高かった。

役割遂行（先生は先生としての役割を遂行できているという感覚）：印象に残る先生の自由記述では、「ネガティブ内容」が突出して役割遂行得点が低かった。

印象に残る先生の種別では、「中学校の担任部活以外の先生」と「高等学校の担任部活以外の先生」を挙げた人の役割遂行得点の低さが目立った。次いで、「小学校の先生」を挙げた人の役割遂行得点が低かった。いずれも、中学校・高等学校での担任や運動部活動の先生として、よい先生に出会えていないといえる。

指標相互の相関関係の検討

次に、指標相互の相関関係を検討した（表8）。すなわち、調査対象者の教職志望動機と、教職志望動機尺度の各指標、教師との関わり経験尺度の各指標、およびSTT尺度の各指標との相関係数を算出した。

教職志望動機が高い学生ほど、教授志向が有意に高く（ $r=.479, p<.01$ ）、子ども志向、恩師志向、経験活用志向も有意に高かった（順に $r=.364, p<.01$; $r=.465, p<.01$; $r=.407, p<.01$ ）。これはある意味当然といえる。しかし同調志向は、対象者の教職志望動機と有意な相関がなかった（ $r=-.114, n.s.$ ）。すなわち、教職を志望する際には、周囲に流されたり他者

に勧められたりして何となく志望しているわけではないことが示されている。

教師との関わり経験については、受容経験、傷つき経験、親密経験、承認経験のいずれも、対象者の教職志望動機と有意な相関はみられなかった。教師との関わりは、様々な校種や職種の教員とのポジティブな関わりやネガティブな関わりがあるため、統計的な相関関係を算出するとこのようになるのであろう。

STT（教師への信頼感）尺度の指標については、安心が対象者の教職志望動機と有意な正の相関を示し（ $r=.133, p<.05$ ）、不信が有意な負の相関を示した（ $r=-.175, p<.01$ ）。これは解釈しやすい結果といえよう。

表8. 対象者の教職志望動機と各指標の相関分析

	教職志望動機 (4件法)
教授志向	.479**
同調志向	-.114
子ども志向	.364**
恩師志向	.465**
経験活用志向	.407**
受容経験	.098
傷つき経験	-.108
親密経験	.036
承認経験	.086
安心	.133*
不信	-.175**
役割遂行	.095

** 1% 水準で有意（両側）

* 5% 水準で有意（両側）

まとめ

本研究の結果をまとめると、以下の通りである。

1. 本学体育学部学生の教員免許取得希望者の平均的な姿としては、「恩師のような体育教師になり」「子どもの成長を見守り」「スポーツの楽しさを教える」ことが「自分の夢」だというキャリアパスを描いているといえる。
2. 印象に残った先生は、「高等学校の運動部活動の指導者」が圧倒的に多く、約半数弱の学生が挙げていた。「中学校の運動部活動の指導

者」も含めると半数を超える。

3. 「高等学校の運動部の先生」と「中学校の運動部の先生」は「指導力が高く」「理解してくれる」と捉えられている。また、これらの先生を選んだ回答者は、教員になりたいと「非常にそう思う」「少しそう思う」割合を合わせると、中学校で82%、高等学校で76%であった。
4. 中学校・高等学校の「好きな先生」は、「理解してくれ、親身になってくれ」「悩みを聞いてくれ」「指導力が高く」「明るい」先生である。
5. 中学校・高等学校の「嫌いな先生」は、「理不尽」で「すぐ怒り」「威張って考えを押し付け」る先生、もしくは「熱意がない」先生である。高等学校では「授業が下手」も多かった。
6. 教職志望動機が高い学生は、「教授志向」「子ども志向」「恩師志向」「経験活用志向」が高い。しかし、周囲に同調して教職を志望しているわけではない。またこのような学生は、教師に対する「安心」感が高く、「不信」感が低い。
7. 中学校・高等学校の運動部の先生の影響としては、「安心」感との関連が高い反面、「傷つき経験」との関連も高い。
8. 中学校・高等学校の運動部の先生や習い事の指導者、および担任の先生が選択されないで他の先生が選ばれている群に、教職志望動機や教師との関わり経験、教師への信頼感の各指標において、ネガティブな方向性がみられた。すなわち、中学校や高等学校の運動部指導者や担任の先生に関して、よい先生に出会えていない回答者は、教職志望動機も低く、教師との関わり経験もネガティブで、教師への信頼感も低い。

なお本研究は、本学体育学部学生の実態調査である。本学は女子大学であり、本研究では体育系の男子学生の持つ進路やキャリアに対する意識との比較は行っていない。進路やキャリアの問題は、特に女子学生にとっては我が国の雇用や労働、家族といった分野におけるジェンダーの問題と切り離せないものである。今後の研究では、ジェンダーの観点を導入して、本研究の問題意識をさらに発展させてい

きたい。また今後は、本研究の結果をふまえて、仮説検証的な研究を実施してゆくことが重要である。

引用文献

- 春原淑雄(2010) 親の要因、教職志望動機および教師効力感の関連：教員養成課程の新入生を対象として 学校教育学研究論集, 21, 1-10.
- 中井大介・庄司一子(2008) 中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連 発達心理学研究, 19, 57-68.
- 中井大介・庄司一子(2009) 中学生の教師に対する信頼感と過去の教師との関わり経験との関連 教育心理学研究, 57, 49-61.
- 中澤篤史(2011) 学校運動部活動の戦後史(上)：実態と政策の変遷 一橋社会科学, 3, 25-46.
- 大石千歳(2014) 教師との関わり経験と教師への信頼感が教職志望動機に及ぼす影響その2—体育系短大における小学校・幼稚園の教員免許取得希望者を対象とした調査— 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 49, 11-25.